

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第337集

島田Ⅱ遺跡試掘調査報告書

宮古短大地区宅地造成事業関連詳細分布調査



(財) 岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

島田Ⅱ遺跡試掘調査報告書

宮古短大地区宅地造成事業関連詳細分布調査

序

本県には、縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、10,000カ所にも及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化遺産を保存し、後生に伝えていくことは、県民に課せられた重大な責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にともなう社会資本の充実もまた重要な施策であります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発の調和も今日的課題であり、当文化振興事業団は、埋蔵文化財センター創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、「宮古短大地区宅地造成事業」に関連して、平成10年度に実施した島田Ⅱ遺跡の詳細分布調査結果をまとめたものであります。この調査は、岩手県教育委員会事務局文化課が、平成9年度に実施した試掘調査の結果を受けて、本遺跡の詳細な内容を把握する目的で、当センターが実施したものであります。

今回の調査によって、平安時代と思われる住居跡・土坑などの遺構や、土師器・須恵器・鉄製品・鉄滓などの該期の遺物が数多く確認され、本遺跡が平安時代の大集落跡であることが予想されるに至りました。今後、本調査が実施された際には、岩手県沿岸地区の古代の様相がさらに明らかになるものと思われれます。

最後になりましたが、これまでの試掘調査及び本報告書作成にご援助・ご協力を賜りました岩手県住宅供給公社・宮古市教育委員会をはじめ、関係各位に衷心より謝意を表します。

平成11年9月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 船越昭治

例 言

1. 本報告書は、宮古市大字八木沢第4地割ほかに所在する、島田Ⅱ遺跡の詳細分布調査結果を収録したものである。
2. 今回の調査は、「宮古短大地区宅地造成事業」の実施に伴う事情の詳細分布調査である。調査は、岩手県教育委員会と岩手県住宅供給公社との協議を経て、勸岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。
3. 岩手県遺跡登録台帳に記載される遺跡番号・遺跡略号はLG43-0338・SMDⅡ-98である。
4. 調査期間は平成10年5月25日～8月31日、調査面積は、遺跡の対象面積165,000m²の約3%にあたる4,500m²である。調査は3名体制で実施したが、濱田 宏・玉山健一は全期間、酒井宗孝・小山内 透・宮本節子・星 雅之・杉沢昭太郎は1名ずつ交代であった。室内整理期間は、平成11年1月4日～3月31日である。
5. 本報告書の執筆は、Ⅰを高橋興右衛門、それ以外を濱田が担当し、編集も濱田が行った。
6. 出土した石器類の石質鑑定は、花崗岩研究会に依頼した。
7. 本報告書作成にあたり、次の方々にご協力・ご指導いただいた。(敬称略・順不同)
千葉孝雄(楯ヶ崎小学校) 佐々木弘(沼袋小学校) 日下和寿(岩手県立博物館)
深沢百合子(札幌学院大学) 竹下将男(宮古市教育委員会)
8. 野外調査では宮古市の作業員30数名、室内整理では当センターの期限付職員1名の協力をいただいた。
9. 遺跡内の基準点測量・基準杭の設置は、㈱ハイマーテックに委託した。
10. 調査で得られた出土遺物や整理に関わる諸記録等については、岩手県立埋蔵文化財センターで保管・管理している。

目 次

序
 例言
 目次
 報告書抄録

<本文>

I	調査に至る経過	1
II	遺跡の立地と環境	2
	1. 遺跡の立地と地形	2
	2. 基本層序	2
	3. 周辺の遺跡	3
III	野外調査・室内整理の方法	5
	1. 野外調査	5
	2. 室内整理	5
IV	調査結果	6
	1. 各トレンチの遺構・遺物分布状況	6
	2. 分布調査結果から	6
	3. まとめ	6

<図 版>

<写真図版>

図1	岩手県全図	1	写真図版1	空中写真・基本層序	19
図2	遺跡位置図	3	写真図版2	検出状況(1)	20
図3	検出状況(1)	10	写真図版3	検出状況(2)	21
図4	検出状況(2)	11	写真図版4	検出状況(3)	22
図5	検出状況(3)	12	写真図版5	検出状況(4)	23
図6	検出状況(4)	13	写真図版6	出土遺物(5)	24
図7	想定された調査範囲	14	写真図版7	出土遺物(1)	25
図8	トレンチ配置図	15・16	写真図版8	出土遺物(2)	26
			写真図版9	出土遺物(3)	27

<表>

表1	各トレンチの出土遺物と検出遺構	7
----	-----------------	---

報告書抄録

ふりがな	しまだにいせきしくつちょうさほうこくしょ							
書名	島田Ⅱ遺跡試掘調査報告書							
副書名	宮古短大地区宅地造成事業関連詳細分布調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第337集							
編著者名	濱田 宏							
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL 019-638-9001							
発行年月日	西暦1999年11月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査機関	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しまだにいせき 島田Ⅱ遺跡	いわてけんみやこ 岩手県宮古市 大字八木沢 4-1-1 第4地割ほか			39度 36分 48秒	141度 57分 47秒	1998.5.25～ 1998.8.31	4,500m ²	「宅地造成」 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
島田Ⅱ遺跡	集落跡	縄文時代 平安時代	陥し穴状遺構	5基	縄文土器(中～後期) 石器(石鏃・磨石・ 砥石ほか) 土師器・須恵器 フイゴの羽口 鉄製品(大型釣針・鉄 鏃・銚先・刀子ほか) 陶磁器	遺構・遺物の分布調 査の為、未精査。本調 査は次年度以降予定。		
			堅穴住居跡および住 居状遺溝	110棟				
			土坑類	40基				
			炭	3基				
			製鉄・鍛冶関連(炉跡 2基含む)	5箇所				
			溝状遺構	5条				
					鉄滓 炉壁 獣歯			

I 調査に至る経過

鳥田Ⅱ遺跡は、「宮古短大地区宅地造成事業」の実施に伴って、この事業区域内に位置することから発掘調査することとなったものである。

宮古短大地区宅地造成事業については、三陸沿岸の中核都市として伸びている宮古市においては、近く地方拠点都市の指定を受ける等、今後も発展が続くことが予想され、これに伴う住環境の整備が宮古市の住宅施策の急務とされていることから、宮古市から当社に団地開発の要請があり、これを受け当社が宅地造成を行い、居住環境の良好な宅地を供給するために実施するものである。

当事業の施行にかかる埋蔵文化財の取扱いについては、平成8年5月9日付け8岩住第104号で「埋蔵文化財の分布調査について（依頼）」の文書によって、岩手県教育委員会に対して分布調査の依頼をしたのが最初である。依頼を受けた岩手県教育委員会では、平成8年5月28日に分布調査を実施し、その結果は平成8年6月11日付け教文第214号「宮古短大地区宅地造成事業に係る埋蔵文化財の分布調査について（回答）」で住宅公社へ回答があり、その際工事施行範囲内に埋蔵文化財が存在していることが確認され、埋蔵文化財が包蔵されている可能性のある範囲については、再度調査が必要である旨の回答であった。回答を受けた住宅公社では、平成9年2月26日付け8岩住第587号「埋蔵文化財の調査範囲について（依頼）」の文書で、岩手県教育委員会に試掘調査範囲を依頼した。依頼を受けた岩手県教育委員会では、平成9年3月6日付け教文第1011号「短大地区宅地造成事業に係る埋蔵文化財の分布調査について（回答）」で住宅公社へ回答があり、試掘調査範囲が決定された。

このことにより住宅公社では、平成9年4月4日付けで文化庁長官及び岩手県教育委員会教育長に対し、文化財保護法第57条の3第1項に基づく通知を行った。

また、平成9年4月10日付け9岩住第13～1号で埋蔵文化財試掘調査の依頼も行った。依頼を受けた岩手県教育委員会では、平成9年4月21日～23日及び5月12日～14日で試掘調査を実施し、その結果は平成9年4月28日付け教文85号及び平成9年5月20日付け教文199号による回答に示すとおり、相当数の埋蔵文化財が確認されたことにより、岩手県教育委員会と今後の進め方について何度か協議を行った結果、住宅公社としては、調査範囲が全区域に及んだ場合等の調査期間、調査費用がどの程度となるか判断できないことから、調査範囲の面積確定をし今後の方針を協議するため、今回（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターに試掘調査を依頼することになったものである。

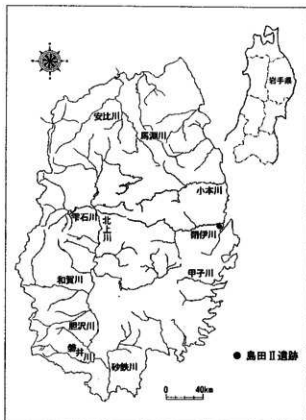


図1 岩手県全図

II 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の位置と地形

島田II遺跡は、関東日本旅客鉄道山田線宮古駅の南方約2.5km付近にあり、遺跡の北西部は県立宮古短期大学の校舎裏に接している。遺跡は、山地から北西～北東方向に舌状に延びる数本の尾根と、それに挟まれる深い埋没谷からなる。標高は17～84mで、最も高い尾根と現道路面との比高は約70mを測る。本遺跡は、国土地理院発行5万分の1地形図「宮古」(N J - 54 - 13 - 3)、2万5千分の1地形図「宮古」(N J - 54 - 13 - 3 - 1)の図幅内に含まれ、遺跡の中央部は北緯39度36分48秒、東経141度57分47秒付近にある。

宮古市は、岩手県沿岸部のほぼ中央にあつて、北側で田老町・岩泉町、西側で新里村、南側で山田町と接し、東側には太平洋を臨む。太平洋に向かって北東に突き出す重茂半島の鮭ヶ崎は、本州最東端に位置している。宮古市周辺の海岸には、浄土ヶ浜をはじめとする三陸海岸の景勝地が数多く存在するが、その海岸線は、宮古市を境としてその北部と南部では様相が異なっている。南部が典型的なリアス式海岸であるのに対して、北部は海岸段丘の発達した比較的内り組みの少ない隆起性の海岸線となる。また、後者の中でも田野畑村と菅代村にまたがる北山崎周辺は、100mを越える海蝕崖が続いている箇所である。三陸海岸一帯は、山地が海岸直前まで迫っており、低地は河川流域の狭小な範囲に限定される傾向が認められる。宮古市内を流れる河川は、盛岡市と川井村の境にある区界峠付近に端を発する閉伊川、その支流である近内川・山口川・長沢川、宮古湾に注ぐ津軽石川、本遺跡の北西側を流れる八木沢川などがある。前述のとおり、市内の低地は、これらの河川流域に沿って狭く帯状に広がっている。丘陵地は、この低地周辺や海岸に沿ってみられ、閉伊川の北側では板屋付近から帯状に、南側では長沢川との合流地点や磯鶏西側の低地と山地の間に分布する。また、海岸付近では山地間に帯状に延びている。山地は、丘陵地の背後に起伏量の比較的小さい小起伏あるいは中起伏山地となって広がるが、標高300m前後の低い山地である。低平地の少ない宮古市では、このような丘陵地や山地の一部が人工的に地形改変され宅地化されている地区が多いが、今回の調査もそれに伴う事前調査である。

2. 基本層序

調査区内の法面観察によると、埋没谷部以外では次のような土層が観察される。(写真図版1参照)

(第I層) 黒褐色土 シルト

森林腐食土で、草木根を多く含む。層厚5～10cm。

(第II層) 黒褐色土 シルト

本層の下位面が古代の生活面と思われる。尾根頂部では薄いまたは存在しない。層厚0～20cm。

(第III層) 黄褐色土～褐色土 粘土質シルト

古代の遺構検出面である。隆起した花崗岩間の凹みに存在する。層厚0～30cm。

(第V層) 灰白色土 砂質土

風化花崗岩層で、通称マサ土。乾燥状態で灰白色を呈する。層厚未確認。

一方、埋没谷裾部では以下のような層序が基本となっている。

(第I層) 黒褐色土 シルト

表土で、木根・草根を含む。層厚5～20cm。

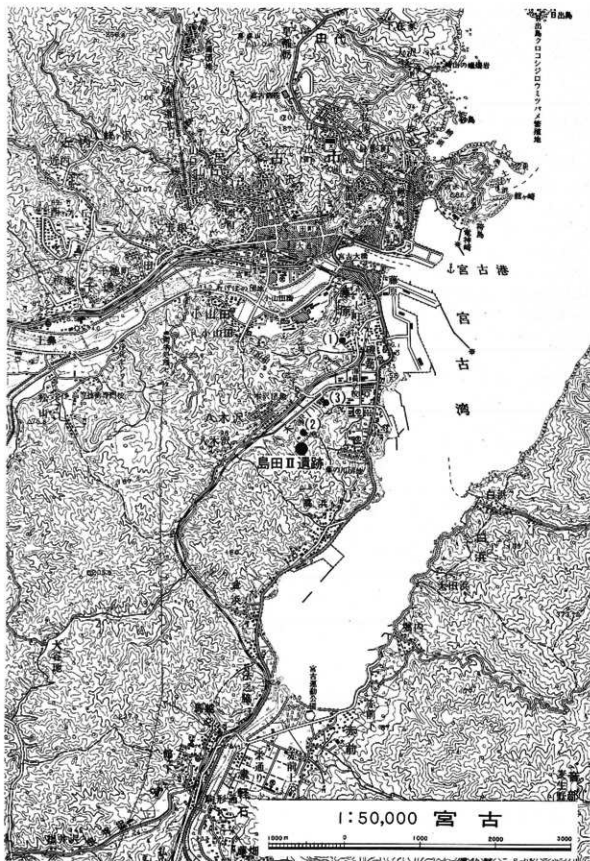


圖2 遺跡位置圖

(第Ⅱ層) 黒褐色土 シルト

主な出土遺物は鉄滓で、古代の層準と思われる。粘性が強く水っぽい。層厚 10～30cm。

(第Ⅲ層) 黒色土 シルト

縄文時代の層準で、花崗岩の風化礫を含んでいる。「安家」と思われる火山灰が10cmほどの厚さで堆積している箇所もみられる。縄文土器片が出土するが、少量である。層厚 10～80cm。

(第Ⅳ層) 褐色土 風化花崗岩層

風化しきれない花崗岩の基盤層である。層厚は未確認。

また、埋没谷の最深部では、第Ⅲ層下に層厚 50cm 以上の暗褐色土層があり、最深部の深さは 1.5m 以上を測る。その層からは遺物は出土していない。

3. 周辺の遺跡

八木沢川周辺には、縄文・弥生時代、古代、中世の遺跡が数多く確認されており、数カ所の遺跡が本調査されている。その代表的な遺跡3カ所を以下に示す。

(1) 上村貝塚 (昭和 62 年調査)

宅地開発に伴い発掘調査された貝塚である。検出された遺構は、縄文時代中期中葉～後葉の堅穴住居跡 11 棟、埋設土器・人骨等、弥生時代の住居跡 5 棟、奈良時代の住居跡 9 棟、平安時代の住居跡 7 棟などである。

(2) 中谷地、鳥田遺跡 (昭和 59・60 年調査)

沿岸地区の運転免許センター予定地として調査されたが、数年後県立宮古短期大学が建設された。今回の調査区は北西部で短大校舎裏と接しており、その際の発掘調査で確認された平安時代の堅穴住居跡などからは、本遺跡の内容の一部が窺える。出土遺物も今回得られたものと同時期と思われる、土器の坏・甕類のほか鉄製品等が出土している。

(3) 磯鷗館山遺跡 (昭和 59 年～62 年調査)

湾岸埋め立て事業に関連して、城館遺跡として発掘調査された。検出された遺構は、中世(城館主体部は 15 世紀代と推定される)の掘立柱建物跡 11 棟・空堀跡 1 条・土橋跡 1 基などのほか、平安時代(9～10 世紀後半)の堅穴住居跡 27 棟・土坑 18 基などである。

今回の試掘調査によって明らかとなった鳥田Ⅱ遺跡の内容は、中谷地・鳥田遺跡および磯鷗館山遺跡の古代のそれとほぼ同様のものであるが、多くの鉄製品や鉄滓・フイゴの羽口等の遺物が出土していることから、本遺跡は鉄生産・鉄加工等の生産遺跡でもあることが予想される。

引用・参考文献

- 岩手県企画開発室 (1973):『北上山地開発地域土地分類基本調査 (宮古)』
小田野哲彦・高橋義介 (1991):『上村貝塚発掘調査報告書』岩理文報告書第 158 集 録 岩文振
光井文行・玉川英壽 (1990):『長根Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩理文報告書第 146 集 録 岩文振
宮古市教育委員会 (1994):『崎山遺跡群Ⅲ』宮古市埋蔵文化財調査報告書 41
宮古市教育委員会 (1995):『花原市遺跡』宮古市埋蔵文化財調査報告書 46
宮古市教育委員会 (1995):『磯鷗館山遺跡発掘調査報告書』宮古市埋蔵文化財調査報告書 43
宮古市教育委員会 (1995):『宮古市内遺跡発掘調査概報Ⅰ』宮古市埋蔵文化財調査報告書 47

Ⅲ 野外調査・室内整理の方法

1. 野外調査

前述のように、今回の分布調査は、平成9年度に2回実施された県教委事務局文化課の試掘調査結果を受けて、当センターが発掘調査区全域にわたる遺構・遺物の分布状況を確認し、遺跡の範囲および全体規模の把握を目的として実施されたものである。本遺跡の発掘対象面積は165,000m²で、最終的には幅1.5～3m、長さ5～30mの試掘トレンチ170本、面積にしておよそ4,500m²の試掘調査となった。調査期間は、平成10年5月25日～8月31日のおよそ3ヶ月間である。

文化課における試掘調査によって、主に尾根の頂部に平安時代の遺構・遺物が確認されていたが、今回の調査では、遺跡全体の総遺構数がある程度予測できるような試掘調査となるよう心がけた。実際の調査では、尾根から谷に向かう急斜面を除く、尾根頂部の平場周辺と大きな埋没谷の裾部を中心に試掘トレンチを設定し、遺構・遺物の有無を確認した。表土や雑物の除去には重機を使用したのが最小限に止め、検出作業や木根の処理は人力で行った。

遺構が発出されたトレンチについては、100分の1の縮尺で平面図を作成し、フィールドカードにその内容(検出された層位・状況・略図等)を記載した。検出段階で出土した遺物については、トレンチごとに層位で取り上げ、その種類や出土量などをフィールドカードに記入した。フィールドカードへの記載内容については、事前に調査員間で協議した。

写真撮影は、遺構が確認されたトレンチについては、すべて検出状況として35mm版モノクロームとカラーリバーサル各1台で行った。また、調査終了直前の平成10年8月21日には、セソナ機による試掘調査区全域の空中写真撮影を行った。

調査開始当初には、平面直角座標第X系にのった3級基準点6点と補点20点の設置を外部業者に委託し、調査区域内における各トレンチの位置確認に使用した。なお、基準点の成果値の一部は、図3のトレンチ配置図に記載している。

2. 室内整理

出土遺物は、野外調査と並行して雨天時などに水洗まで行い、その後土器類は室内で接合・復元作業を行った。鉄製品は写真撮影後に保存処理を施した。鉄滓については、種類によらず各トレンチごとにまとめて重量のみ計測した。(表1に数値を記載)なお、遺物の実測図・拓本等はいっさい作成しておらず、代表的な遺物写真のみを掲載している。(写真図版7～9)

野外調査で作成した各トレンチの検出状況図は、さらに3分の1に縮小後トレースし本報告書に掲載した。(図4～7)縮尺は400分の1である。写真図版には、堅穴住居跡が重複した状況や埋没谷付近の土層堆積状況、鉄関連の遺構など、本遺跡で特徴的な検出状況写真を選び掲載した。(写真図版2～6)

なお、今回の試掘調査で得られた遺物の中には、実測図等で詳細に報告すべきものがあるが、これらについては、本調査が実施された際にあわせて報告する予定である。仮に本調査が行われなかった場合には、何らかの形で筆者が報告する。

IV. 調査結果

1. 各トレンチの遺構・遺物分布状況 (表1及び図3～6・8参照)

調査の結果検出された遺構は、竪穴住居跡110棟、土坑40基、縄文時代の陥し穴状遺構5基、炭竈3基、製鉄・鍛冶関連5カ所(炉跡2～3基を含む)、溝状遺構5条である。遺物は、土器類が平安時代(9～10世紀)の土師器大コンテナ(42×32×30cm)2箱、同じく須恵器小コンテナ(42×32×10cm)1箱、フイゴの羽口中コンテナ(42×32×15cm)1箱、縄文土器50点余りが出土した。石器は総数で10点ほどで、縄文時代の石鏃・磨石、古代のものと思われる砥石が出土した。鉄製品は30点あまり見つかったが、大型釣針・銚先・鉄鏃・小札が各1点ずつのほかは、刀子や角釘類が多い。その他の出土遺物には、古銭2点(1点は元豊通寶)、陶磁器20点余り、鉄滓(製錬滓・鍛冶滓・流出滓)大コンテナ3箱、炉壁数点、獣歯(シカ)1点などがある。

各トレンチの遺物・遺構の分布状況は、次ページ以降の表1に一覧表で示し、次に遺構が確認されたトレンチの平面図を検出状況図として掲載した。図8には、今回設定した遺跡全域のトレンチの配置を示している。

2. 分布調査結果から (図7参照)

設定した170本のトレンチのうち、何らかの遺構が確認されたものは75本のトレンチに及び、尾根部では主に竪穴住居跡や住居状遺構が、埋没谷の裾に向かう緩斜面では製鉄・鍛冶関連遺構が検出された。その他、土坑・炭竈・溝状遺構などはほとんどが尾根部で見ついている。本遺跡内の尾根は、幅の広いところで20～30m、概ね10m程度の幅しかなく、竪穴住居跡が尾根幅いっぱい密集していたり、数棟が重複している部分も見られた。住居跡の規模は、一辺が4～5m台のものが多く、中には7mを超える大型住居も数棟確認された。この大型の竪穴住居跡1棟に幅40cmのサブトレンチを入れたところ、遺構確認面から住居跡床面までの深さは50cm以上に及び、土師器のほか鉄製の大型釣針(長さ8cm)や刀子が出土した。このことから、本遺跡の遺構・遺物の残存状況は、極めて良好と思われる。

次に、出土した土師器の特徴を挙げる。坯は、すべてクロコ成形後底部が回転糸切りされているもので、数点ではあるが底部に再調整が施されるものも見られる。甕は非クロコ成形で、口縁部が短く体部上半部が膨らむものが目立つ。器面調整は、内外面ともヘラケズリ調整が主体である。

出土遺物の内容から、本遺跡の主体となる時期は、9～10世紀代を中心とする平安時代(磯崎館山遺跡古代第I群～第IV群期)と考えられる。

図7には、今回の分布調査の結果、「調査が必要と思われた範囲」「調査不要と思われた範囲(遺物が出土しない埋没谷部や近年地形改変された部分など)」「鉄滓等の出土する埋没谷部分」「立木の範囲」の4地区に全体を分けた図を掲載した。これは、筆者が野外調査終了時に判断し作成したもので、この資料に基づいて調査終了後に委託者と協議を行っている。調査必要・不要範囲の総面積は図7内に示しているが、これは委託者側に算出していただいたものである。なお、スクリーントーンで示されていない部分は急傾斜の斜面部で、調査不要と判断した範囲である。

3. まとめ

以下に、今回の調査によって得られた島田Ⅱ遺跡の全体的な内容について、箇条書きに示す。

- ・島田Ⅱ遺跡は、9～10世紀にかけて営まれた古代集落跡であり、尾根部は主に居住域として利用し、谷に向かう斜面は一部造成等を行って(T106～T114及びT141～146周辺)緩斜面や平場を作り出し、鉄生産・鉄加工の場として利用していた。
- ・鉄関連施設については、製鉄なのか鍛冶なのかは不明であるが、鉄滓の出土量などから後者の可能性が高い。時期は、集落が営まれた時期とほぼ同じと考えられるが、詳細は不明である。

- ・調査区中央部の埋没谷 (T157 付近の大きい埋没谷) で遺跡全体を西区と東区の2つに分けると、住居跡や製鉄・鍛冶関連遺構は後者に集中しており、(住居跡では東区は西区の3倍以上) 集落の中心は遺跡東側の海寄りにあるものと考えられる。
- ・磯崎館山遺跡の住居跡の占地例から、ある程度急な斜面部にも遺構が検出される可能性があり、注意が必要である。
- ・本調査時においては、土捨て場の確保・木根の処理・重機の進入路等、平坦地や緩斜面での調査より時間的なロスが見込まれる。

最後になるが、今後遺跡全域の本調査が実施された場合には、多くの遺構の存在だけでなく、製鉄・鍛冶関連あるいは沿岸部の特色である漁業関係など、生業の面からも沿岸地域の古代の様相がより一層明らかになるものと考えられる。

表1 各トレンチの出土遺物・検出遺構

※(多)は比較的出土量が多いもの

トレンチ番号	土師器	須恵器	鉄製品	鉄滓	羽口	炉壁	土製支脚	古鉄	縄文	石器類	火山灰	その他	検出遺構
1													
2													
3													
4													
5													
6													
7	壺												住居2
8													
9	壺												住居2
10													住居2
11										網片			
12	壺												住居2
13	壺												
14					○								
15													住居1・壺1次?・土坑3
16													
17													住居2・土坑2
18													住居1・土坑2
19													住居1
20	坏・壺	○	○(不明)	○	○							陶磁器	住居4
21	壺	○											
22	壺												
23									時期不明				
24	壺												住居2・土坑2
25													
26	壺(多)	○(多)		○									住居2・土坑4
27	壺(多)	○(多)	釘・釣針	○						磨石			住居4・土坑3
28	壺(砂底有)	○(不明)											住居5・土坑3
29		○											住居1・土坑1
30	壺(多)	○		○(多)				中期?				陶磁器(伊万里)	土坑1?
31	坏・壺(多)	○		○(多)			○			砥石			
32	壺	○		○(多)									
33	坏・壺(多)	○		○				後期?					住居1
34	坏・壺(多)	○	釘	○0.6kg				中期?(多)・後期?				陶磁器	住居2・土坑1
35	坏・壺(多)	○		○23.0kg	○(多)	○		後期(多)・中~後期				陶磁器	焼土(伊藤?)2
36	坏・壺(多)	○											
37											○	陶磁器(備前・美濃)	
38	壺			○	○								炭化物の灰が1ヶ所
39	壺(多)			○	○								
40	壺	○	鉄線	○								平手の土師器(備前?)	住居2
41	壺												
42	壺												
43	壺												

ト レ ン チ 番 号	土 器 器	須 恵 器	鉄 製 品	鉄 滓	羽 口	炉 盤	土 製 支 脚	古 銭	縄 文	石 器 類	火 山 灰	其 他	検 出 遺 構
44									後期? 前期(多)	湖片・磨石 石鉄 剥片			灰窯? 1
45	亮	○	釘									陶磁器	
46	亮												
47	亮												
48	亮												
49	亮										○		
50	亮												
51	亮												住居3・土坑2
52	亮												住居1・土坑1
53	亮												
54	亮												住居4・土坑1
55	亮												住居1・土坑1
56	亮			○									住居2
57	亮												住居1・隔し穴1
58	亮												住居1・土坑1・灰窯1
59	亮	○											住居3
60	坏・亮												
61									後期?				隔し穴1
62													土坑2
63													住居1・土坑3
64													土坑2・灰窯1
65													
66													
67	亮												
68													溝? 1
69													
70													住居1・土坑2
71													住居3
72													住居2
73													
74													住居1
75										石斧			住居2
76													
77													
78													
79													
80													
81	亮												土坑1
82													
83													住居1
84													
85													
86													
87													溝? 1
88													
89													住居2
90	亮											陶磁器	住居3・土坑3
91				○		○							
92									前期?			陶磁器(唐律)	
93												陶磁器	
94												陶磁器	
95				○0.5kg		○						陶磁器	灰窯1
96	亮		釘	○		○				石鉄 石棒		陶磁器	
97	亮			○								陶磁器	
98	亮			○								陶磁器	住居2
99	亮			○									住居1・土坑1
100	亮			○									住居1・土坑1
101	亮			○									住居1・土坑2
102	亮			○									
103	亮			○									
104	亮(漆に多)	○		○						石鉄		陶磁器(伊万里)	住居4
105	亮	○		○								陶磁器	
106	亮	○		○								陶磁器	竈土1
107	坏・亮	○		○					時期不明				竈?・土坑?・隔し穴?

トレンチ番号	土師器	須恵器	鉄製品	鉄滓	羽口	炉	土製支脚	古	縄文	石器類	火山灰	その他	検出遺構
108	壺	○		○					時期不明				
109	坏・壺	○	釘	○	○								
110	坏・壺	○	○(不明)	○	○								
111	坏・壺(多)			○	○								
112	坏・壺		刀子?	○	○								
113	坏(多)・壺(多)		刀子・釘		○(多)								
114	壺	○		○						磨石			
115	壺			○									
116	壺	○		○					中期?				
117	壺						○						
118	坏・壺			○	○								
119													
120													住居1・溝? 2
121	坏・壺	○			○								住居1
122													
123	壺												住居2
124	壺		釘										住居4
125	壺	○		○	○								住居2
126													住居1
127	壺												住居2
128	壺												
129	壺			○									
130	壺			○									住居1
131		○											住居2・土坑1
132													住居3
133													住居4・土坑2
134	坏・壺	○	鋸・釘2	○									陶磁器・キセル
135	坏・壺	○			○					磨石・磁石			住居5・炭層1
136													
137	壺	○			○								厚手の土師器(壺?)
138	坏・壺												
139	壺	○											住居1
140													
141	坏・壺(多)	○	刀子2・小丸 かみ状鉄製品 銅製品・釘?	○・鉄滓11kg	○(多)	○				磨石			厚手の土師器(壺?) 鉄滓1・炭層1
142	坏・壺			○									
143	坏・壺			○0.4kg	○								
144	壺		釘	○1.3kg	○					挿刺器			
145	坏・壺	○	釘	○1.3kg	○								陶磁器
146	坏・壺(多)			○2.7kg	○(多)	○							陶磁器(壺・土師器)
147									前期				
148									早期?				
149													
150	坏・壺												
151	壺(多)				○		○		時期不明	磨石・磁石			溝2(住居)・住居4・溝?
152													
153	坏・壺												
154													
155				○									陶磁器(壺戸・美濃)
156			○(不明)										陶磁器
157					○								
158				○・鉄滓10kg	○								撰鉢
159													
160													
161							○						
162									前期				
163													陶磁器
164													
165													
166													
167													
168													
169	壺		環状製品	○0.5kg									陶磁器
170	壺		○(不明)	○0.8kg			○						

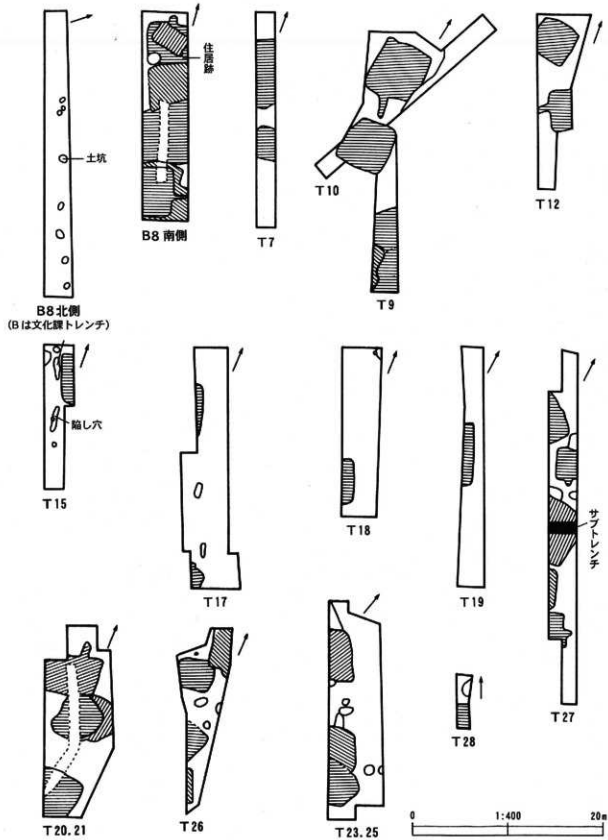


図3 検出状況(1)

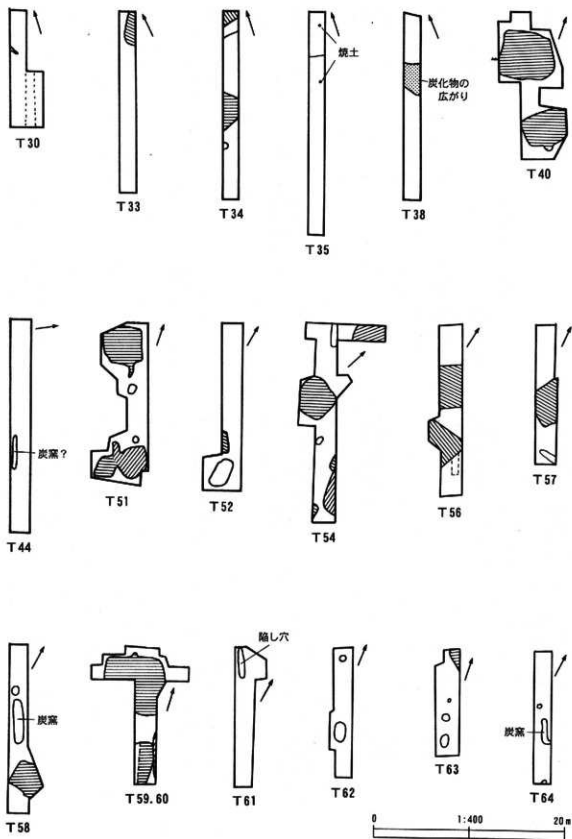


図4 検出状況(2)

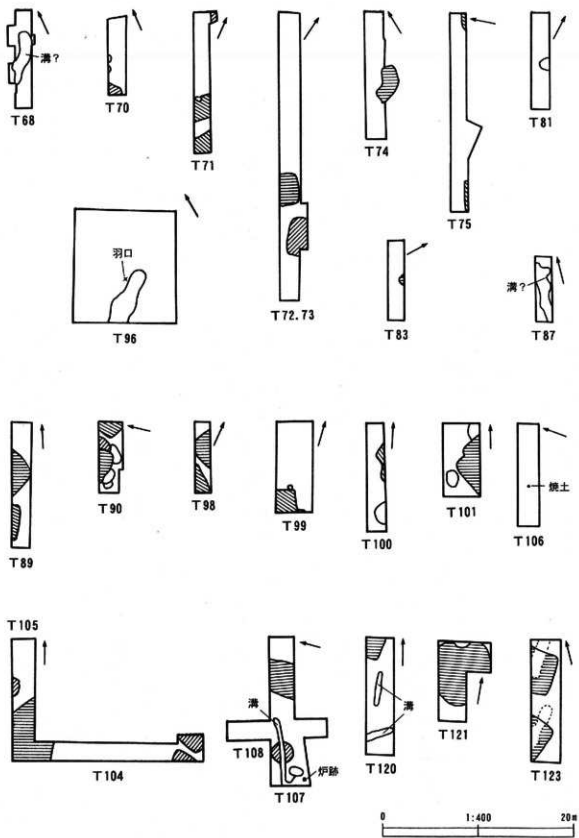


图5 検出状況(3)

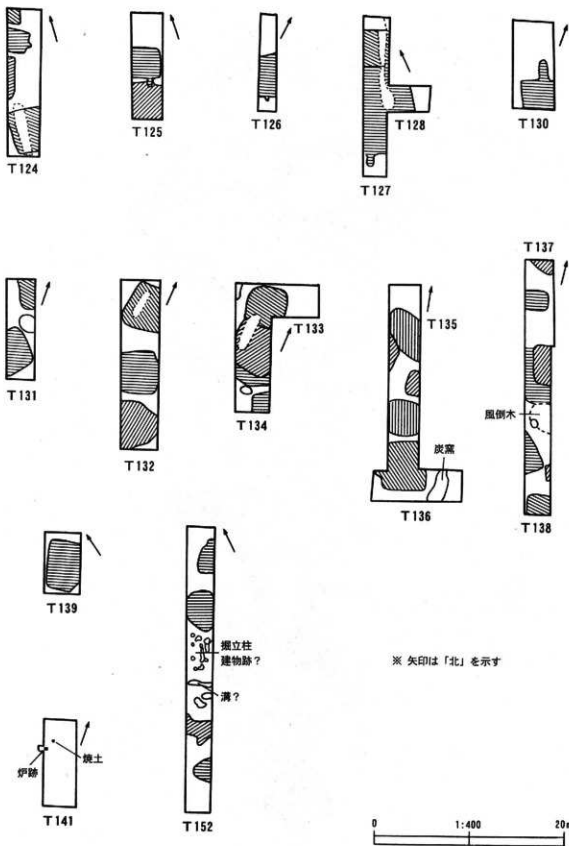
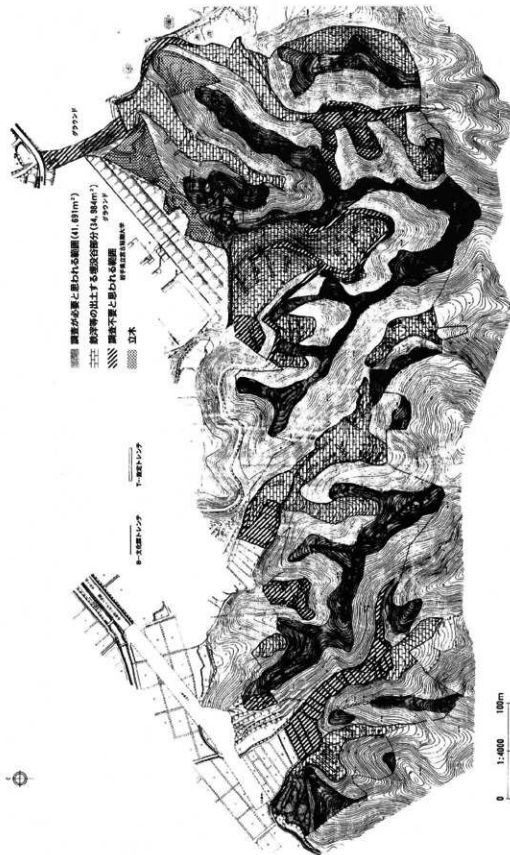


図6 検出状況(4)



調査区内でスクリーンのない部分は急傾斜で調査不要とした範囲である。

図7 想定された調査範囲

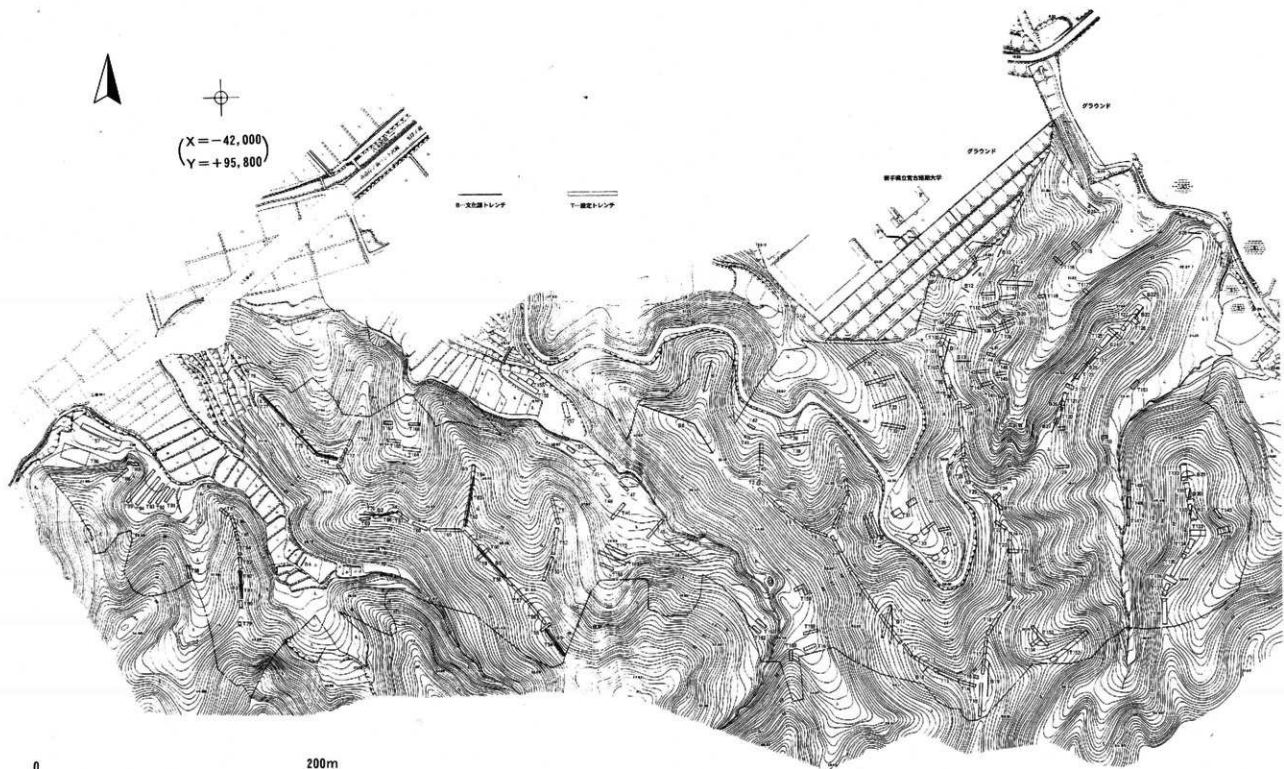
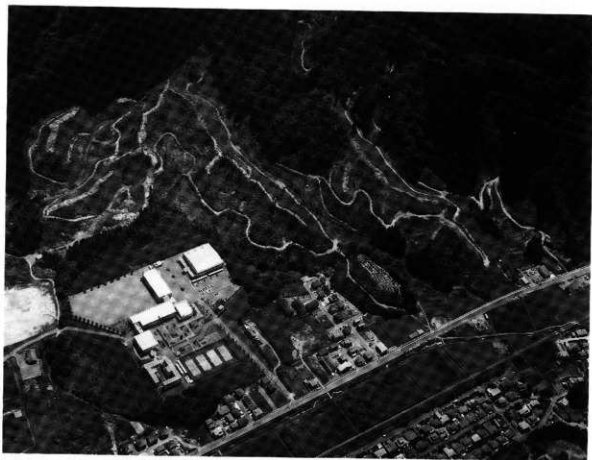


図8 トレンチ配置図

写 真 图 版





遺跡全景



基本層序



- I 森林腐食土
- II 黑褐色土
- III 褐色土
- IV 風化花崗岩層

模式圖

写真図版1 空中写真・基本層序



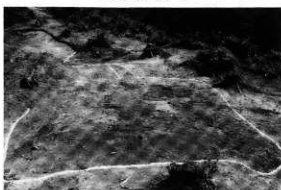
基本層序



作業風景 (東→)



文化層 No 8 トレンチ



T10



T22



T26



T27



T28 焼土・炭化材・礫を伴う土坑

写真図版2 検出状況(1)



T29 ~ 31



T30



T31 深掘断面



T33



T34



T35



T40

写真図版3 検出状況(2)



T51



T88 深掘断面



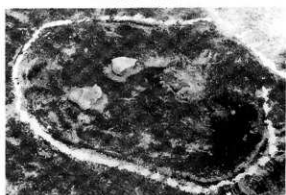
T99



T104・T105



T106



T106 鍛冶炉?



T109・T110

写真図版4 検出状況(3)



T121



T123



T127・T128



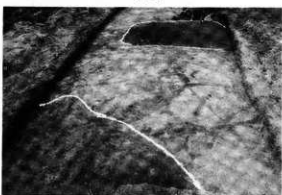
T130



T131



T132



T137

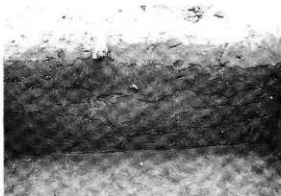


T138

写真図版 5 検出状況 (4)



T141 周辺の階段状平場



T141 深掘断面



T141 出土刀子



T141 鍛冶炉?



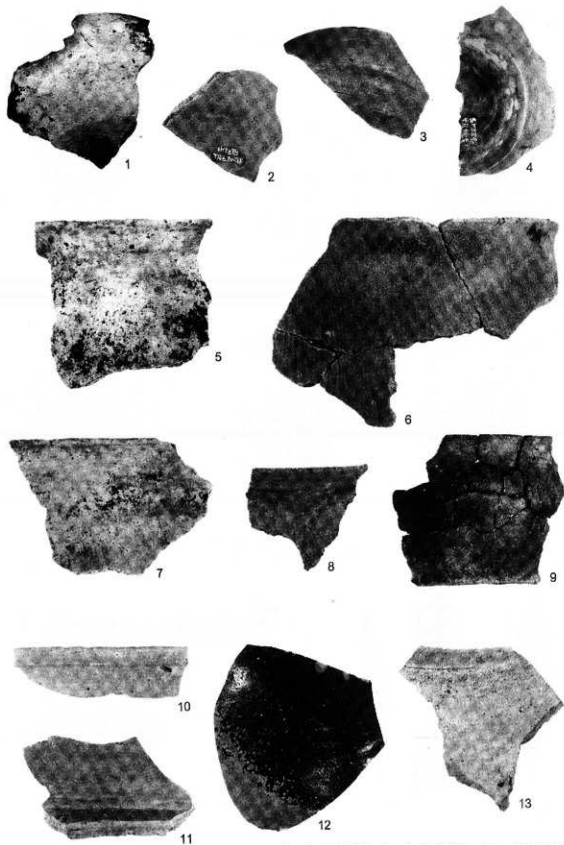
T151 安家火山灰の堆積状況



T158 ~ T161

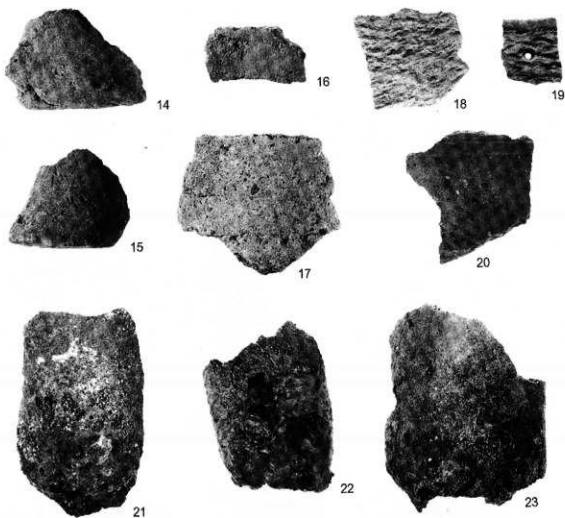


T152



1~4 土師器坏、5~9 土師器壘、10~13 須惠器

写真図版7 出土遺物(1)



14・15 土製支脚、18～20 縄文土器
16・17 厚手の土師器（製塩？）、21～23 フィゴの羽口

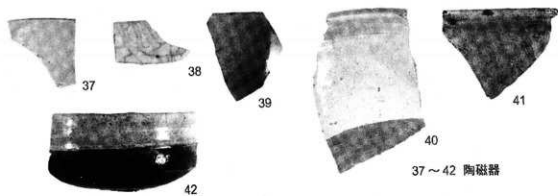
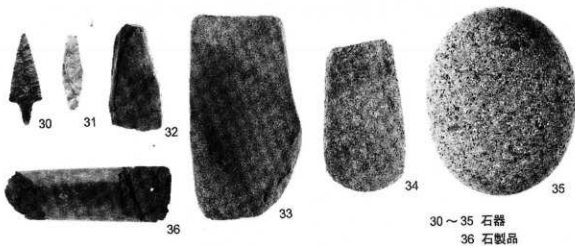


27 (T27サブトレンチ出土)

24～29 鉄製品

(24 銛、25 鉄鏃、26 小札)
(27 釣針、28・29 刀子)

写真図版 8 出土遺物(2)



写真図版9 出土遺物(3)

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長 佐 藤 基
副 所 長 伊 藤 直 司

[管理課]

課 長 川 浪 清 徳
主 査 立 花 多 可 志
主 事 日 影 陸 夫

[調査第一課]

課 長 小 田 野 哲 憲
課 長 補 佐 佐 々 木 清 文
主 任 文 文 酒 井 宗 孝
主 任 文 文 小 山 内 透
文 文 中 田 迪
門 文 吉 田 充
専 門 文 鎌 田 勉
課 長 小 笠 原 健 一 郎
主 任 文 鳥 居 達 人
主 任 文 濱 田 宏
主 任 文 佐 々 木 進 悦
主 任 文 安 藤 山 紀 夫
主 任 文 木 戸 口 俊 子
主 任 文 小 野 寺 正 勝 之 則
主 任 文 阿 部 正 彦
主 任 文 千 葉 柴 直 人
主 任 文 高 木 晃 一
主 任 文 佐 藤 淳 一 男
主 任 文 菅 原 武 彦 大
主 任 文 半 澤 倉 池 貴 拓
主 任 文 菊 村 上 多 郎
主 任 文 本 中 丸 直 美
主 任 文 丸 山 浩 治
主 任 文 佐 藤 綾 子
主 任 文 平 藤 原 賢 徳
主 任 文 江 藤 弘 敦
主 任 文 小 林 弘 卓
主 任 文 小 原 広 幸

期 限 付
専 門 職 員

嘱 託 藤 島 志 子
" 新 田 卜 ヨ
" 佐 々 木 光 恵

[調査第二課]

課 長 佐 藤 基
課 長 補 佐 高 橋 興 右 衛 門
主 任 文 文 中 川 重 紀
主 任 文 文 高 古 橋 義 介
文 文 阿 松 部 貞 眞 身 澄
門 文 小 原 尾 芳 幸
期 限 工 藤 一 徹
専 門 文 金 子 佐 知 子
文 岩 沢 計
文 早 坂 悟
文 佐 々 木 務 光
文 晴 山 雅 之
文 佐 々 木 雅 球
文 杉 沢 昭 太 郎
文 瀬 村 浩 二 郎
文 北 村 忠 昭
文 金 鈴 子 昭 彦
文 平 布 谷 里 義 香
文 山 熊 谷 口 俊 規
文 吉 田 佳 恵
文 北 田 里 和
文 古 川 徹 徹

期 限 付
専 門 職 員

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第337集

島田Ⅱ遺跡試掘調査報告書

宮古短大地区宅地造成事業関連詳細分布調査

印刷 平成11年11月25日

発行 平成11年11月30日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185

TEL (019) 638-9001

印刷 (株)阿部 謙 写 堂

〒020-0015 盛岡市本町通2丁目8-37

TEL (019) 623-2361

